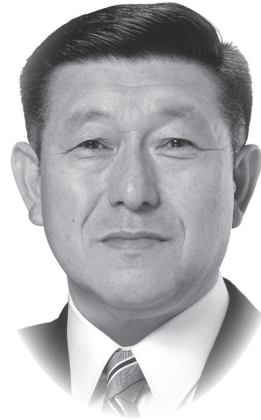


秋田県知事

佐竹敬久



知事略歴

昭和二十二年十一月十五日 秋田県生まれ
昭和四十六年三月 東北大学工学部精密工学科卒業
昭和四十七年三月 秋田県庁入庁
平成八年四月 総務部次長
平成九年二月 // 退職
平成十三年七月 秋田市長
平成十三年八月 秋田県市長会会長
平成十五年六月 全国市長会副会長
平成十五年十月 税制調査会委員
平成十七年七月 秋田市長(再任)
平成十九年六月 全国市長会会長
平成十九年七月 地方制度調査会委員
平成二十一年四月 秋田県知事

県政運営にあたって

私はかつて二十五年間県に勤務し、主に工業行政と市町村行政を担当させていただき、その後二期八年、秋田市長を務めさせていただきました。

特に市長時代は、政府税調委員や全国市長会長の任にも就き、地方税財政や分権改革の論議のまっただ中に身を置くことになりました。

これらの経験は、県政運営にごく自然に入り込める強みでもある反面、解り過ぎるが故の弱みにもつながります。まずは一年生、白紙の状態で思慮しなければならぬことが多いということを頭に刻み厳しい時代の県政運営にあたる覚悟です。

最近の自治行政について

都道府県であれ市町村であれ、まさに自治体行政は大転換の時代を迎えました。財政の逼迫はもとより人口減少時代への対応、世界的経済

危機の中にあつての地域産業の再構築、重要性を増す各方面の危機管理・等々、これまでのルールや考え方では追いつけない課題が山積しています。

しかし、我々の頭の構造は簡単には変わりません。結局は手の打ち方も経験則の延長になったり、あるいは異条件の先進事例なるものを十分な考察なしに形だけ導入したり、さらには決して責任を負うことはない、その道の権威筋なる人の言を鵜呑みにしたものになることが多々あるような気がします。結果として、華々しく打ち上げたわりには空回りという事例が目につくこととなります。

大転換の時こそ、安易に他者に頼ることなく、多面的かつ冷静な考察の上に立ち、自分で局面を切り開くという自立の原点に立ち返るべきです。

自分の頭で考え、自ら行動する自治体

自立の原点とは、まずは自分の頭で考えることではないでしょうか。特に自治制度はあるにしても、長い間国からの指導・指示に従っていたらば差し障りが少ないという事実上の中央集権制度に慣れ親しみ、自分の頭で考え、自分で解析し、自分で構想を組み立て行動することが基本であるべきという意識が薄らいでしまった気がします。

このような視点から、市長時代には職員に対して、意識・知識・見識を磨けど繰り返し話してきました。加えて、幹部職員ほど部下に仕事を丸投げせずに、縦・横・斜め、あらゆる方向から仕事を考察するように言い続けてきました。

就任早々、これらについて職員に訴えているところですが、当然に私自身にも当てはまることであり、新米知事として反復自戒しながら新生秋田の創世に全力を尽くしてまいります。

このたび第五十一代秋田県知事に就任いたしました佐竹敬久です。よろしくお願いたします。秋田の四月は、全県的に市町村長選挙や県議・市議から首長への転身に伴う補欠選挙もあつて、さながら統一地方選挙のミニ版の様相を呈しました。結果、多くの新人が桜花爛漫のなかでそれぞれの座に就き、新しい秋田のスタートの感を強くしています。

眩いばかりの秋田の春ですが、就任早々に新型インフルエンザへの対応に追われました。あれよあれよという間にWHO世界保健機構はフェイズ5に対策レベルをあげ、国はもとより自治体も対応に追われることになりました。

県の危機管理部門は二十四時間体制を敷き、また秋田空港に着く韓国からの定期便では機内検査が行われるなど、関係者にとっては大変なゴールデンウィークとなりました。この号が配布されるころには治まってほしいものです。